

浜松マラソン、どうかこうにか完走はできた。その年の年末、袋井クラウンメロンマラソンを完走することができた。様々な事が佐久間町であった。様々な人が佐久間町を去った。それはその人が幸せになるために自分で決断した結果だ。右に行くか左に行くか、その路はまた次に進むと、また分かれ道がある。人は一日に9000回もの決断をするという。朝起きて起きるか起きないかに始まり決断ばかりしている。その中には大事な決断もあれば、大事ではないモノもある。人生もそうだ。

「富士登山競争を挑戦しないか？」

「日本一過酷なハーフマラソン」そんな言葉が、私に中川さんからあった。

スタートは山梨県の「富士吉田市役所」ゴールは「富士山頂」距離は21km（高低差約3000m）

私44歳、あの病気から4年が過ぎ、心の中がモヤモヤしていた。そして聖霊三方原病院で聴いたハーモニカの唱歌赤とんぼのメロディー、とその人を思いだした。脳梗塞からリハビリでのハーモニカの練習、そして今がある。と。

富士登山競争に向けてのトレーニングが始まった。仕事が3時半終わるときには、半場から羽ヶ庄（はがしゅう）までの上り坂の練習をした。日曜日は竜頭山（1352m）に登った。

富士登山競争は最初の道路で、ある程度先に行かないと、登山道に入ると前には出にくい。そんな話だった。富士登山競争は毎年7月の第三金曜朝7時にスタートする。その大会は日本が戦争で負けたとき、日本が戦争で焼け野原になったとき、その三年後の夏に始まったそうだ。これからの日本の国を夢見て始まったそうだ。第一回大会は昭和23年1948年だという。そのもつと前、1913年（大正2年）故金栗四三が発起人となった富士登山競走もあつたという。中川さんが私に教えてくれた。

私はその日は富士登山競走のある7月の第三金曜日は仕事を休む、そう決めて、その練習を始めた。私の暮らす半場では、毎年7月の最終土日に、お祭りがある。お祭りで、私は神樂をやるようになった。神樂の練習もあり。走るトレーニングもやり。この年は、やることが多くあり充実した日々が続いた。

大会前日の木曜は半日有給、富士登山競争の金曜日は一日有給を取得した。大会前日、木曜日、私は車で半場から愛知県にある、飯田線本長篠駅近くの待ち合わせ場所に行き、新城の佐藤さんの車で中川さんと三人で山梨県の富士吉田市に向かった。ナビの案内は英語だった。

東名の浜松西インターから高速に乗る、周りの景色はビュンビュン流れていく。牧之原のサーブエリアで少し休憩し、また走る、しばらく走ると、雄大な富士山が見えてきた。駿河湾も見える。富士山は、その裾野を左右にいっぱいに広げていた。

あゝたまを、雲の上に出し〜♪

唱歌その富士山のように、その富士山は山頂を雲から突き抜けて顔を出していた。

あの富士山に富士山頂に、明日は走って上ることができるだろうか。不安があるけど、ワクワクもしている。御殿場インターで下り、車は国道を富士吉田市に向かつて走っていく、車の窓から富士山を探すが雲で隠れて見えなくなっていた。

車は駐車場に止まり。明日の富士登山競争のスタート会場である富士吉田市の役所に三人で向かった。受付会場には大勢のランナーたちがガヤガヤしていた。木曜日なのに多くの人が、そこには集まっていた。地元物産、スポーツ用品、多くのテントが並んでいる。

その内、雲で隠れていたその富士山が、雲の切れ間から、顔をのぞかせた。多くのランナーが、その富士山を見ている。

中川さんが、私に言った。

「明日のレースは、あそこがゴールだ」と、7月の富士山、雪は被っていない。その荒々しい富士山頂を指差し、楽しそうに、私に言った。明日のレースを楽しもう。とも。

あの病気から4年が過ぎていた。

中川さんが手配してくれた旅館に、私たち三人は向かった。その駐車場からも、やはり富士山が見える。昼間高速道路から見た。静岡県側から見た。富士山より男っぽく見える。そう思うのは私だけだろうか。山梨県側から見る富士山は荒々しく感じる。

旅館の温泉に入り、旅館の大広間で夕ご飯。隣の人は視覚障害者のランナー二人組だった。一人は弱視でもう一人の人は全盲だと言っていた。去年はサポートの人と一緒に宿泊したのだけど、今年はマラソン会場で待ち合わせだとも言っていた。

「山頂コースですか」と私が尋ねたら

「去年は山頂コースだったが、今年は五合目」だと言っていた。

夕食が終わり、その人たちは、弱視の人が全盲の人を連れて、込み合った畳の大広間を出ていった。

次の日、富士吉田市役所の道路に富士登山競争を走るランナー集まっている。人人人。その人垣の遠く向こうの方に、高所作業車の上で人が叫んでいる。

「今年も富士山の女神に会いに行くぞ。」と、その後ランナー全員でシュプレヒコールだ。

「えいえいおー」

スタートまでのカウントダウンが始まる。

10・9・8・7・6・5・4・3・2・1ピストルの音とともにランナーは一斉に飛び出した。

富士吉田市の朝の7時のオルゴールが鳴っている。

「あくたまーを雲のー上に出し〜♪」

少し走ったところで左に曲がる、商店街が続く、朝から応援がある。目の前に富士山がある。

上り坂が続く、また左に曲がり、右に曲がれば杉並木の道を、上り坂の道を、ただただ走る。汗が流れる。参加している人のみんなの汗が、コース上に流れていく。

馬返しから道が狭くなる。登山道、凸凹のコース、前の人を抜くことはできない。喉が渇く、ボトルから水を口に喉に流し込む。

馬返し

8時09分03秒

そう言えば、昨日の視覚障害者の人は、今どこを走っているのだろう。そんな人は、どのように走っているのだろうか。サポートの人が、そのランナーにコースの状況を声で伝えているとは聞いたが、富士登山競争、その登山道は荒れている。サポートは、どんなふうにも伝えていけるのだろうか、分からないことが多い、知らないことが多い。

五合目

9時09分44秒

五合目が見えてくる。六合目を抜ける。七合目次は、えーまた七合目七合目が続く。

八合目、ココで11時に間に合わなければ、関門で前には進めない。それでは完走できない。

八合目

10時48分44秒

関門に間に合った。進もうと登ろうとするが、体力も気力も萎えてきた。ゆっくり歩こうとしていると、すると、背後から

声が聞こえる。

「まだ、間に合う。諦めるな！」

それは遠山郷で知り合った、高野さんの声だった。

高野さんは私を抜いて先に進んだ。

よし、俺もやるぞ！気合いを入れた。疲れた身体だが、その身体を鞭打って進んだ。一般の人が登山道で応援してくれている。何か差し出している人がいる。声がする。

「砂糖にしますか。塩にしますか」

塩をもらって、少しなめた。しょっぱい。

山頂の鳥居が見える。ゴールは、山頂は、後少しだ。

私48歳、平成20年、富士登山競争のゴールに辿り着いた。

11時25分31秒

なんとか時間内に完走することができた。

ゼッケン2499

総合タイム

4時間25分31秒

先にゴールした。中川さんや佐藤さんに迎えられるのゴールだった。

コップの水をもらった。ゴールした人、それを応援する人でごった返していた。

私は、ウエストポーチのチャックを開けて500円をだし。そのコインを富士山頂の自動販売機に入れ、その自動販売機からでたコーラを手にした。そのコーラを山頂の展望台で一口飲みほし、

富士山頂の展望台から、下を見下ろした。まだまだ多くのランナーが必至の形相で登って来る。ゴールでは11時30分の制限時間が近くなる。会場からカウントダウンの音が聞こえる5・4・3・・・

「ガンバレ」「かわいそう」そんな声が聞こえる。2・1・ゼロ

2008（平成20）年、その年の富士登山競争は終わった。

その富士登山競争は、次の年も参加した。その年は悪天候で五合目までだった。

その次の年は、八合目で11時1分43秒、閉門にて終わった。

20012（平成24）年

チャレンジ富士五湖ウルトラマラソン 100キロの部

100キロマラソン、を走った、私は52歳になっていた。

馬塚さん、そんな浜北のウルトラランナーの人にその大会を覚えてもらった。

会場は山梨県の富士北麓公園、スタートは朝の五時だという。初めての100キロ、馬塚さんと道の駅「なるさわ」で風呂に入り、その駐車場で車中泊をした。次の日は3時半ごろにでかければ十分間に合う。馬塚さんが言った。三時半ごろ道の駅「なるさわ」を出れば、富士北麓公園の駐車場に車を止めることができる。とも言っていた。

朝3時に目が覚め朝食をとって、3時半には車で富士北麓公園に向かった。馬塚さんの車に着いていった。ところが車は渋滞だった。富士北麓公園の駐車場は一杯なので誘導員に他の駐車場に移動された。馬塚さんの車も慌てているようだ。私も慌てた。馬塚さんの車を見失い、私は一人他の知らない人の車のテールランプを追いかけ、だだっ広い駐車場に着いた。送迎バスの長い列に並んだ。その送迎バスに揺られ富士北麓公園に着き、その体育館で着替えをする。隣の人はタイから来たという。その人はミズノのツワーでの参加だという、タイでは100キロマラソンは少ないと言っていた。

デジカメと一緒に写真を撮り、お互いの健闘をたたえ合った。身振り手振りを交えて

「富士山、見えるとこさ」と言った。外は曇り空だった。

着替えを澄まし。まだ真っ暗の中スタートをした。富士五湖を全て巡る118キロの部のランナーを見送った。次は私たちのスタートだ。富士北麓公園のグラウンドに入った。周りは霧で覆われ幻想的な風景に囲まれていた。

ゲストラランナーのはるな愛の甲高い声が周りの山々にこだましている。グラウンドのスタート地点にランナーが集まるころ、辺りの山が少しずつ明るくなっていく。

チャレンジ富士五湖ウルトラマラソン 100キロの部スタート。
はるな愛の

「必ず帰ってきてネ♡」の言葉に見送られてランナーたちは北麓公園の坂道を下って行った。明るくなり周りを見渡したが富士山は出ていない。霧に隠れている。

最初山中湖、微かに富士山が見える。それをデジカメに収めて先を急ぐ。次に河口湖、西湖と精進湖と続く、精進湖のエイドから、112キロの人は本栖湖に行くのだが、私たち100キロの部の人は、ココから折り返す。身体が悲鳴を上げる。坂道で歩く人が現れる。川合の知り合いが、施設エイドをやっていた。

90キロ地点あたりだろうかタバコの香りがした。前方にタバコをふかしながら歩いている人がいた。

その人は何故走っているのだろうか。何故このチャレンジ富士五湖ウルトラマラソンを申し込んだのだろうか。人は人の考え方は様々だ。そんな人もいるだろう。それにしても分からない。今から10年前のチャレンジ富士五湖ウルトラマラソンを走ったときの私の感じた事だ。

残り5キロ、残り3キロ、歩くより遅いペースだけど歩かない。最後のエイドが終わり、ここからは北麓公園までの上り坂が続く。私は地元佐久間のランニングクラブ「さくまRC」のTシャツを着て、この大会を走っていた。背後から私のシャツを見て

「シンマさんですか」と声をかけてくれる人がいた。

その人はブタ子さんだった。

ブログを書いていた人なので知っていた。今は走るより山が主だと聞いている。

その人と励まし合いながら北麓公園を目指した。もう夕方の6時はとくに過ぎている。辺りは闇に包まれている。遠く向こうに北麓公園のグラウンドの灯りが見えてくる。その灯りをとすための発電機の音だろうか、エンジンの音が鳴り響いている。

「おかえりなさい」ボランティアの皆さんの声が聞こえる。

まる一日走り通した。そして100キロを走り通して辿り着いた。そこは山梨県の富士北麓公園のグラウンドだった。

完走メダルをもらった。ずっしり重いメダルだった。

2012年 チャレンジ富士五湖100キロの部 13時間35分00秒だった。

初めての100キロ、それは身体に大きなダメージがあった。それは次の朝起きて左の足の下脚部の前の方、ふくら脛の前の方と言った方が分かりやすいだろうか。脛骨の前側、一見に、そこには、肉が付いて無いように感じるどころ。そこがすごく痛くなった。歩くのがやっとなかった。もしかしたら、これが疲労骨折というものなのか？

そう思って佐久間病院を受診した。待合所で私の娘の同級生のお婆さんに言われた。下平（しもったいら）の人だ。

「どうしたダイネ。足が痛いダカイね」

私「100キロ走ったら、こうなった」

「バカだね。もうそんなことスナナね」スナナ↓やるな

私「.....」

佐久間病院の先生に受診してもらい、

「筋肉疲労ですネ」と言われた。

「何やりました」

私「チョット走りました」

私は脛骨の前の方には筋肉は無いと思っていた。よく考えてみれば分かりそうだが、足を動かすには様々な筋肉が協力し合って歩みを進めているのだ。それは、手の筋肉も全ての身体の筋肉が協力し合って私はチャレンジ富士五湖100キロの部のゴールに辿り着くことができたのだ。

2013年は12時間54分 2014年 13時間34分だった。その日は肌寒い雪のちらつく日だった。2013年のチャレンジ富士五湖の大会に行く時に、萩田さんが、富士山一周のマラニックをやるのでと自車で富士山の周りを走っていた。富士山一周のマラニックそのことを私に話した。

私は、その日、静岡市で行われた癌サイバーの「リレー・フォー・ライフ」のイベントを終わってからの時だった。

自転車に乗る萩田さんは、その自転車で昔オウムの問題で騒がれた、上九一色村の方面に向かって坂道を上って行った。

私は富士北麓公園にチャレンジ富士五湖の大会に参加するために、会場に向かった。

次の年の5月萩田さんは

ぐるっと富士山一周100kmウルトラ・マラニックを始めた。

富士山を時計回りに一周するという。

チャレンジ富士五湖は三回走ったけど、毎回富士山は機嫌が悪く顔を出してくれなかった。2013年のチャレンジ富士五湖は雪が降り寒い一日だった。北麓公園には雪が積もっていた。完走はできたのだけど走り終わって寒さに震え自分の車に行くにも大変だったと記憶している。そして次の年、萩田さんに出会い、私は富士五湖、萩田さんは自分のマラニックのための計測をしていたのだ。そんな萩田さんの大会を、私は参加することに決めた。

飯田線に乗り豊橋駅に出て、東海道線で沼津の駅まで行った。途中ウッチャンとトモゾウさんとヨッピーさんに出合った。沼津の駅からは御殿場線で岩波駅まで行くことになる。ウッチャンは一旦沼津の駅で改札を抜け、そこで御殿場線のキップを買った方が料金が安い。と言っていた。

御殿場線で、岩波駅に到着、そこにマイクロバスがあるので、それに乗ってください。萩田さんの指示のもとそれに乗ると、多くのランナーが乗っていた。定刻になり運転手さんがマイクロバスのドアを閉め、そのねこバスは大人の遠足・大人のピクニックの世界に向け出発した。

その人たちは萩田さんに魔法をかけられた、その人たちは、まるで、何かイケナイ事を始める宗教団体のグループのように、みんな黙りこくっていた。周りのウッチャンやトモゾウさんやヨッピーも、無駄な話はしなかった。しばらく走ると闇夜に光輝くところが、そこは

富士遊湯の郷 大野路

私たちは大広間に通された。スタートは夜中の12時、それまで時間がある。仮眠しよう。目をつぶって少し経ち。最初の大会ということで、萩田さんが参加者を集め説明があるという。旅館の会議室にランナーは集められた。

萩田さんは少し緊張気味だった。一人参加者が来ていないという。定刻になったので説明は始まった。そこで萩田さんの携帯が鳴った。

「どうしたヨ。みんな集まっている」

そこで、日付が違う。と言われたみたいだ。

「えっっ」

萩田さんが申込用紙をポケットから出し覗いた。

「.....」

何か話があつて携帯はポケットにしまった。

「まったく、文章の分節を見れば分かりそうなものを」「実際、みんな来ている」「ブツブツブツ・・・」
小声で言っていた。

私の席の隣りの人が、「クス」っと、笑った。

だいぶ緊張気味だ、一つのことを成し遂げるといふことは大変なようだ。と思った。

説明会が終わり。ランナーは旅館の前に集まり記念写真を撮つて、そこをスタートした。真つ暗な道、永遠と続くような道を走つた。富士サファリパークの歩道橋の下を走り、ランナーのチカチカライトを追いかけ走っていく。真夜中の走り、周りは霧に包まれている。小雨だろうかジャージが濡れる。チャレンジ富士五湖を三年通つたけど晴天の富士山を見ることができなかったなく。今回も無理がなく。そんな感じがした。

白糸の滝、そのコンビニにて朝食をとる。朝霧高原の道、昔ハング・ライダーで飛んだ山がある。富士山は雲で隠れている。上九一色村の方面に上つていく、春に萩田さんと別れた交差点を萩田さんが自転車で向かった方向に進む。上九一色村オウムの面影はない。そこは高原のとても綺麗な牧草地帯だ。今は上九一色村の行政区は無い名前も無くなった。今は甲府市と河口湖町になった。佐久間町は浜松市になつても佐久間町という名前を残した。それが佐久間町時代の町制の残した果実なのかもしれない。

静岡県の県境を越え山梨県を走る。峠の山頂にエイドがある、そこから本栖湖が見える。その向こうの山々が雪をかぶっている。振り返れば富士山が見えるはずだけど、その富士山は雲の中だ。日本一の山、富士山、本栖湖の向こうに見える山々も素晴らしいのに、富士は日本一の山と人は思う。エイドにさよならを言い、少し経つと50キロ地点がある。また少し走ると、木の陰から富士山が見える。坂を下り右に曲がり、道の駅「なるさわ」そこから富士山が見えた。デッキカク見えた。三年前から、富士吉田市に来たのに、今回その富士山が見えた顔を出してくれた。しばらく見入っていた。そんなとき静岡市のナカヤマさんが来て、その富士山に感動している私に言った。

「何感動してるダ、早く行くゾ」と。

そうか。人は同じものを見て、同じようには感じないのだ。私が感動したのは、久しぶりに見たからだ。あと、50キロ以上の距離を走ってきたからの富士山の姿だったから感動したのだと思う。また、その人の感じ方（感動しやすい人）そんなこともあるだろう。（私は感動しやすいタイプ）

私は、そんな自分でイイと思つている。泣きたいときは泣いて。笑いたいときは笑い。怒るときは怒る。

出口治明さんが本で書いてあつた。人生とは喜怒哀楽だと。まだまだ富士山一周のコースは長く残っている。私は富士吉田市に向かって走り出した。ここはチャレンジ富士五湖で知った道だ、道路右側にあるコンビニで飲み物を買う。コンビニの定員が、

「走っているのですか？」と声をかけてくれた。

私は「富士山一周している途中」と返した。

「チャレンジ富士五湖では毎回ボランティアしています」「本当に頑張ってください」と励ましてくれた。

ここは山梨県の南部は国が進めた合併が進まなかった地域だ、実際私も富士河口湖町・鳴沢村・富士吉田市と走ってきた。これからも山中湖村・忍野村・道志村と走る。

あの平成の合併は、何だったのだろう。山間部は観光資源のない所はドンドン衰退していく。衰退していく地域は、地域に住んでいる若者はドンドン減っていく、そうすると学校の合併が進む。山には子どもの声が聞こえなくなってくる。しかし、少数だけ残っている子どもたちもいる。

1985（昭和60）年の日本航空のジャンボ機墜落事故があつた。その墜落現場、群馬県上野村、そんな村がある。そこは多くのイターン者が定住しており。都市部からの子どもを持つ親の移住者が結構いるそうだ。それはどうしてだろう。そこには黒澤丈夫という村長がいた、元ゼロ戦のパイロットだという。その人は時代の先端に行く海軍で過ごし、不慣れた村に帰ることに抵抗があつた。と著書に書いてあつた。また、村長に、あるインタビューで、今私のやることは、そう言つて。フィリピンから来たお嫁さんが子どもを産んだ、その幼子を見

で、これから私はこの子どもに、ココに住んで、ココに生まれて良かった。と言われる様な上野村にすることです。と答えていた。今その上野村は「子ども達が住んでいて良かったと思える村づくりと高齢者が安心して住める村づくり」を目指しているそうだ。

これは、この村だけのことではなく、日本全国の村々が、そうならなければならない。と思う。それは首長だけでなく、そこに暮らす大人は考えなければならぬことだと思う。

子どもたちが住んでよかったと思える村づくり。

「国家の品格」その本で藤原正彦さんは

「家族愛」「郷土愛」「祖国愛」それをしっかり持って「人類愛」に繋げていくのだ。

と書いてありました。

籠坂峠を越えると静岡県だ。静岡県の小山町だ。御殿場市を通って、裾野市を通って裾野市須山にある富士遊湯の郷 大野路がゴールとなる。

道の駅「なるさわ」から、その富士山は走るランナーを見守っていてくれるような気がした。最後、自衛隊の大きなトラックが行き交う道も右側に大きな富士山が見えた。

富士山の横にある宝永山が移動していく。

萩田さんの呼びかけで集まったボランティアの人が、私を迎えてくれた。ゴールしたらビールがあった。ほんまもんのビールだった。のどごし生ではなかった。エビスビールだった。それから温泉に入り、宴会と、まさに至れり尽くせりの

ぐるっと富士山一周100kmウルトラ・マラニックだった。

そのマラニックはその年から2019年まで参加した。

その萩田さんは、

富士山頂往復マラニック

もやっているという。

ぐるっと富士山一周100kmウルトラ・マラニック

を始めた、もっと前の話であった。

私より一回り年上の女性のランナー、ウッチャンが言っていた。

「普通の道路を走っていても何も言われないけど、富士山は別」と

富士山を登っていると、登山者に、田子の浦港から走ってきたと言うと。ビックリして応援してくれるの、と言っていた。

2011(平成23)年、私51歳のころ、私の子どもが大学を卒業し富士吉原のアパートを借りた。そこに泊まった朝、散歩にと、そのマラニックのスタート地点、田子の浦港の白灯台に行こうと思った。

田子の浦 ゆち出でてみれば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける

万葉集 山部赤人の歌である

田子の浦港へ行く途中の道路の脇にあった。真っ直ぐ太平洋側に行くと、立ち入り禁止の看板がある。そこをまたいで太平洋に向かった。太平洋に向かって左側にその白灯台はある。田子の浦港を越え、その、もっと向こうに赤灯台がある。波は荒れていた。振り向くと富士山があった。萩田さんたち富士山頂往復を走る人たちは、ココの海の水をカメラのフィルムケースに、その塩水を入れ、それを富士山頂の剣ヶ峰まで持って行く、そこに、その水を撒いてくる。

私は、その年に、その仲間に入ろうと、その申し込みをした。いつものように半場のお祭りの練習と走る練習もした。ところが祭りを終わって、調子が悪くなっていた、乾いた咳もでる。「ゴホ、ゴホ」と。

肺炎だという。始めタンがでただけ、もうでなくなつた。微熱が続く、治りそうできて治らない。「ゴホ、ゴホ」

そんなとき、オオノさんから電話が来た。オオノさんも怪我をしたみたいだ。浜松縦断までには治るから。と言っていた。浜松縦断はやめにした。次は

チャレンジマラニック 3 遠山郷だ。それまでには何とかしたい。「ゴホ、ゴホ」

9月の、その大会には間に合った。酒も美味しく飲めた。

オオノさんはいと、それが大きな怪我だそう。電話で話した時に元気だったそうだけど、再起不能ではないかと話すラン友もいた。

次の夏の第10回富士山頂往復マラニック、それは記念大会だということで、完走者に記念Tシャツがあるという。

私は参加できるだけで嬉しかった。去年は、そのマラニックの時は布団で寝ていた日々だったから。

そのマラニックの会場は去年完成したという田子の浦港運動公園がスタートとなった。富士山頂剣ヶ峰で撒くのも海水ではなく、砂浜の砂になっていた。参加人数が増え、カメラのフィルムケースも手に入らなくなった。からだそう。

ヒロ坊さんのオカリナの演奏で走るメンバー全員で唱歌富士山を歌う。それが終わって、スタート場所である白灯台の横の場所に移動、そこを夕方6時にスタートする。

6・5・4・3・2・1・スタート

クラッカーの音で100人余りのランナーが田子の浦港運動公園を富士山頂に向かってスタートした。

国道を進み、富士宮浅間神社に着く、約15キロ、ここでは山車(だし)の上で火を焚いて勇壮な女性が太鼓をたたいていた。そんな人混みの中を浅間神社境内に着き、これからの富士登山の安全をお祈りして、次に進んだ。

富士宮の町を抜けるとコンビニは無くなる。早いうちに夕飯と、これからの長い道のりの食べ物飲み物を買わないといけない。ランナーが多くなると、最後のコンビニには品物が無くなっている場合がある。という事だった。

500m1のペットボトルを二本、オニギリを買ってリックに詰めた。ココからは真つ暗だ。前方にチカチカライトが見える。ソレを追って走る。

料金所に着いたら、なんとエイドがあった。有り難い。食べ物・飲み物を補給して先を急いだ。富士山を富士山頂を登っていく人たちのライトが光って見える。空の星も綺麗だ。富士山五合目が近づくと眠気も襲ってくる。

道路脇に腰を下ろして目をつぶる。少し眠ると気分も晴れる。先を進む。南の下側に富士市の夜景が綺麗に広がっている。高い山だからだろうか冬の星座、オリオン座も見えた。新五合目でトイレ、自動販売機で飲み物を買おうとしたが、電気が入ってなかった。手持ちの飲み物は500m1一本だ。

6合目で蜂蜜レモンを買った。300円也。ココで防寒着であるカッパを着た。8合目が近くなると辺りは明るくなってきた。朝日があがってきたのか、富士山のシルエットが西の山々に移っている。駿河湾を一望できる。雲海で隠れた隙間から伊豆半島も見える。周りの景色や雲海が絶妙なコントラストをなしている。

山頂の鳥居が遠くに見えるころ、息が苦しくなる。空気が薄くなったせいなのか、深呼吸をする。ユックリ、それを繰り返す。自分の腕をとり脈拍を数えた。隣のランナーに顔色を聞いた。

「ピンク色ですよ。大丈夫ですよ」

それを聞いただけで安心した。

山頂までの渋滞が始まった。ユックリゆっくり進んだ。下山する人もいる。一人の登山者が登山道はずれ山を下って来る。その男性が大きな石に足をかけたら、その石がグラグラ動いた。その下には私を含め多くの登山客が渋滞の中、山頂を目指している。一つ間違えば重大な事故になる。その人は上りの登山客のブーイングで登山道に戻った。

山頂に着いたのが

7時35分

富士山頂で萩田さんに写真を撮ってもらい。そこにリックを置いて、剣ヶ峰に登って田子の浦から持ってきた砂を、手前に撒いてきた。

エイドに戻って、食べ物・飲み物を頂いて、下山をしようとしたとき富士山往復の常連さんTさんがいたので宝永山周りのコースを道案内してもらおうと思った。富士山頂を背に石段を下った。

そのTさんはもう何回も、この大会に出ている、ベテランだ。新五合目までに11時までにつけば楽勝だと言っていた。本当かナ。

女性のMさんも一緒に下ることになった。日の出館で、その人がトイレを借りると言うので、私はTさんに先に行っている。と言った。がTさんに

「待っててやろうよ」と窘められた。

そうだな。俺って冷たい男なのかもしれない。じっと待っていた。

そこからは須走、靴に砂が入る。宝永山の分岐、ココを間違ったら大変なことになる。宝永山、静岡県側から富士山を見ると右側にポコッと出ているところだ、宝永の大噴火の時に出来た山だ。そこはなんか神々しい。砂の中に岩が点々とあり。まるで惑星のクレーターみたいだ。宝永山を出て上り富士宮ルート6合目に合流して新五合目に降りてきた。新五合目に着いたのは10時30分

ココの食堂でウドン。800円也

早く食事を終え、私はTさんより早く、その食堂を出た。よし頑張るぞ。完走したい。そんな考えが出てきた。

とことが、その下りが足に腰に負担になった。また、眠気も襲ってきた。曲がっても曲がっても先は見えない。下っても下っても、同じような道ばかりだ。まるでその場で足踏みをしているようだ。時間だけが過ぎていく。走るのも遅くなる。そんなとき後ろから軽快に走って来る足音が。Tさんだった。Tさんについていこう、そう思ってもTさんの背中中は小さくなっていくばかりだった。日の出館で合流したMさんも、とつくに先に行っているらしい。

私は意気消沈して歩きも入ってきてしまう始末だった。

は。疲れた。富士山頂往復は簡単ではない。厳しいレースだ。

12時31分

料金所エイドに着いた。助かる、飲み物食べ物がある、本当に有難い。遠山郷で知り合ったAさんも、そこにボランティアとしていた。そんな時後ろの方から

「シンマさん私はココでリタイヤします」そんな声がした。豊橋のIさんだ。もう食べるモノも受け付けられないそう。うだ。そうか。私も言った。

「私もリタイヤします」と。そこでAさんが

「エ。ダメだよ。シンマさんは。まだいけるよ」と。

「.....」そこで一緒にいたTさんが

「私は浅間大社までは行こうと思います」と言った。私は「行けるところまで、行こうかな」と言った。

Tさんの背中を追ってまた走り始めた。足が痛い。Tさんに着いていけない。浅間大社まで20キロ、こんな調子で大丈夫だろうか。何時間かかるだろうか。

フラフラ歩いていたら、前方の遠くにビーチパラソルがある。近づくとエイドだ。施設エイドだ。地獄に仏とはまさにこの事だ。

私 「浅間大社まで、あとのくらいですか？」と聞いた。

エイドA 「だいたい10キロぐらい。そこから田子の浦まで15キロですよ」

エイドB「15時には撤収です。私は車で田子の浦まで行きますよ」

私は思った。ココで終わりにしよう。そのように思った。時計は14時40分、まだ少し時間はある。もう20時間以上走っているノダ。もうここでイイのではないか。もう、ココで終わりにしよう。そう思った。私「行けるところまで走っているの、途中で見つけたら拾ってください」そう言っ、走り始めた。

もう少しで、走ることを止めることができる。そう思うと。なんか走りが軽くなった、気がする。

時計は15時になった。もうすぐここに来るだろうか。もうエイドは撤収しているころだろうか。しかし、遅いなく。最後のランナーがいたのかもしれない。後ろを振り返りながら走っていたのだが、・・・来ない。

あれ〜。〜。

諦めた。浅間大社まで走ることにした。富士宮の町に出る、浅間大社はどこだ、と探した。昨日の浅間大社はお祭りでごった返していた、今日は静かだ。ようやく着いた浅間大社、ここまで帰ってくる事ができた。そのことに感謝し浅間大社に手を合わせた。ありがとうございました。と。

ココを

16時25分

ココから電車でと考えていたが、せつかくココまで来たのだから、残り15キロ歩いてもイイ。とにかく行く。と自分の考えは変わっていた。とにかくゴールへ行こうと。

富士宮の駅前で、一人のランナーが居た、歩道橋の上から声をかけたが聞こえないようだ、電車に乗っていくのか〜。

田子の浦に向かって一人歩いていると、背後から二人ずれのランナーが来た、その一人から私に「走りましょう、ヒロボーさんの連絡で6時半までゴールを延長してくれるそうですよ」と教えてくれた。

二人ずれのランナーを追いかけよう私も走るようになった、もしかすると時間内完走、完走Tシャツが手に入るかも、と希望が出てきたのだ。

田子の浦に曲がる高架の橋の所で、遠くに見える二人ずれのランナーが曲がるうとしない「おい、ここを右だぞ〜!!」聞こえないのだろうか、時間はまだ6時前、まだ間に合うかもしれない。

私は二人ずれのランナーを追いかけもせず田子の浦港へと高架の橋をくぐって右に曲がった。

ここからは車で何度も走ったことがある、田子の浦までは直ぐだ、痛い脚を引きずりながら少しペースを上げた、時間は6時、すると田子の浦まで5kmの標識があった。

30分で5km...無理だ!!疲れた体では無理だ。

身体力が抜け、ペースが落ちた、歩道橋をトボトボ上り、田子の浦港での直線道路ではもう日が暮れていた、最後、ラスト、は走った、ゴールを撤収した仲間が車で帰っていく、私は一人、私の愛車軽トラの前にゴールした。

18時50分、24時間50分をかけて、私は「富士山頂往復マラニック 第10回記念大会」を走破した。

富士山頂往復マラニック 112km 一日かけて富士山を楽しんだ。

走り始めて15km地点 浅間大社でのお祭り、そこから真夜中の走りでは大きな月明かりに見守られ走る事が出来た。

料金所跡でのエイドは食べ物 飲み物も沢山あり本当に助かった、夜の富士山から見える富士市の夜景も心に残っている。

富士山八合目からの登山は空気が薄いかから、大変苦しい思いをした。

山頂で私たちランナーを迎えてくれた仲間たち、感謝しかない。

剣ヶ峰の手前で田子の浦の海岸で拾った砂を撒いたのは、今思うと石碑まで行けばよかったと後悔している。

富士山の下山、宝永山を周った。

宝永山とは、末広がり広がる富士山の右側にあるチョココンとできた山だ、河口に大きな石が点在していた、一



緒にいたSさんが自衛隊のテントかと勘違いしていた。
 その他、思い出を語ったら尽きない、私の「富士山頂往復マラニック」だった。萩田さんを始め多くの人に感謝を伝えたい。

富士山よ、ありがとう。

2011年 (平成21年)	DNS	肺炎のため参加できず。
2012年 (平成22年)	DNF	24時間50分時間外ゴール
2013年 (平成23年)		23時間51分
2014年 (平成24年)		23時間44分
2015年 (平成25年)		23時間45分
2016年 (平成26年)	DNF	23時間58分 (富士宮から電車)
2017年 (平成27年)		23時間31分
2018年 (平成28年)	DNS	母親の葬儀のため
2019年 (令和1年)		母親の初盆のため申し込みをしなかった。

